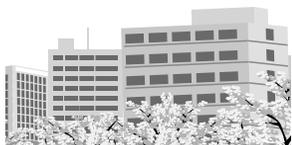


会員の広場



大学の秋入学に寄せて

平野均（東京）

7月の物申す会は「大学の秋入学を考える」をテーマとして行われた。東京大学の「秋入学」提案は、日本の教育が抱えている課題とその解決策として、重要な問題提起をした。グローバル化時代に世界に羽ばたける優れた人材を育てることは時代の要請である。

今日の日本の遭遇している教育界の状況は極めて厳しいものがある。小・中・高校のレベルでは、いじめ

が陰湿化し、学力の低下、ひきこもり、などの現象が問題化している。一方、大学では、低学力、精神的発達の遅滞化、内向き志向、コミュニケーション能力の低下などが問題になって久しい。

東大に限らず、日本の国立大学は法人化から8年が経った。これは国立大学にとっては、大学の独立性とともに、財政基盤に大きな影響を与えることになった。大学の運営費の国家扶助は減額され、経営感覚での大学運営が必要になった。世界の大学と同じ基盤に立つた大学運営である。

すでに、日本のいくつかの大学では、世界レベルへの挑戦が始まっている。従来にも増した外国人教師の登用、外国語による授業の拡充、外国人留学生の受け入れ枠拡大、逆に日本人学生の外国留学制度の拡充、さらに春夏の二回入学制、外国大学での単位取得の加算などで、成果が見られているようである。

今回の「秋入学」をめぐっては、東大のアンケート

調査でも賛否意見が分かれ、どちらかというところの意見が多いように見受けられる。これも当然のことである。改革には厳しい側面がつきものである。

賛成者でも、卒業から入学までの、いわゆるギャップ・タイム（ギャップ・イヤー）をめぐって、その間有効な指導ができる手当て、経済的負担への対処をどうするか、問題にする向きがある。

明確な反対意見としては、「春の入学は、日本の伝統文化に根ざしたものであり、日本の会計制度も4月に始まる。外国に合わせることはない」「日本の大学の授業は日本語を使うべきだ」「そもそも秋入学を言っている時期か」「それより、日本の大学の質を上げることでないか」「研究だけではなく、もつと真剣に学生を指導すべき」「まず少人数指導の徹底、ディベートの取り入れといった指導法に加え、予習・復習、読書量など自宅学習の改善」などの指摘もある。

多様な賛否論があるが、東大の提案は、日本が必要

とする大学教育の改革を促す側面もあって、東大にとっての改革にとどまらず、他の教育機関はもちろん、一般の国民にとっても、改めて教育を考える有効な機会を与えている。

日本の将来を担う、青少年の優れた発達を願えば、教育改革は必要であり、避けて通れない。東大と同じ改革でなくともよい。ただ方向性として、グローバル化時代に対応できる人間をめざしてほしい。ということとで個人として次のような人材の育成を提案したい。

- ① 外国語能力とコミュニケーション能力に巧みな人材
- ② 科学的、創造的能力を持った人材
- ③ 文化的、芸術的能力を持った教養のある人材
- ④ 決断力に富み、優れたリーダーシップを発揮できる人材

これには政府は 물론、産業界、国民一般のサポートが必要である。東大の試みが契機になって、日本の教育改革が前進することを切望してやまない。